

ロバート・ゴダード

北田絵里子/訳

封印 された 系譜

下

ROBERT GODDARD
FOUND WANTING





講談社文庫

常州大学図書館
蔵書系譜(下)

ロバート・ゴダード | 北田絵里子 訳

講談社

|著者| ロバート・ゴダード 1954年英国ハンプシャー生まれ。ケンブリッジ大学で歴史を学ぶ。公務員生活を経て、'86年のデビュー作『千尋の闇』が絶賛され、以後、現在と過去の謎を巧みに織りませ、心に響く愛と裏切りの物語を次々と世に問うベストセラー作家に。他の著書に『秘められた伝言』『悠久の窓』『最期の喝采』『眩惑されて』『還らざる日々』『遠き面影』（すべて講談社文庫）など。

|訳者| 北田絵里子 1969年生まれ。関西学院大学文学部卒業。英米文学翻訳家。主な訳書は『ソングライン』『フージーズ』（ともに英治出版刊）、『遠き面影』（講談社文庫）。

ふういん けいふ
封印された系譜(下)

ロバート・ゴダード | きただ えりこ 訳

© Eriko Kitada 2011



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

2011年4月15日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

本文データ制作——講談社ブリプレス管理部

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-276927-3

目次

封印された系譜 (下)

5

訳者あとがき 北田絵里子

279



講談社文庫

封印された系譜(下)

ロバート・ゴダード | 北田絵里子 訳

講談社

FOUND WANTING

by

ROBERT GODDARD

Copyright © Robert and Vaunda Goddard 2008

Japanese translation rights arranged

with Robert Goddard

℥ Intercontinental Literary Agency, London

in conjunction with United Agents, London

through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

目次

封印された系譜 (下)

5

訳者あとがき 北田絵里子

279

封印された系譜
(下)

●主な登場人物（封印された系譜）

リチャード・ユーズデン 外務省職員。

マーティイー・ヒューイットソン ユーズデンの旧友。

ジェマ・コンウェイ ユーズデンとマーティイーの元妻。

クレメント（クレム）・ヒューイットソン マーティイーの祖父（故人）。

バーニー・シャドボルト マーティイーの友人。

ヴィッキー・シャドボルト バーニーの娘。

ヴェルナー・シュトラウブ マーティイーの知人。

トルマー・アクスデン 巨大複合企業ミヨルニルの会長兼CEO。

ラース・アクスデン トルマーの弟。画家。

エルサ・ストウリング トルマーの妹。

ミケル・アクスデン トルマーの息子。

ペニール・マッセン トルマーの元妻。

カーステン・ブーガー オーフス大学の学生。

ヘニング・ノーヴィ ブーガーの友人。フリーランス記者。

レジャイナ・セレスト ヴェルナーのスポンサー。アナスタシアの信奉者。

アナス・ケルセン コペンハーゲンの弁護士。

ビアギッテ・グリユン ミヨルニルの財務担当役員。

エリック・ロン ミヨルニルの警備担当役員。

ユハ・マタライネン ミヨルニルの顧問弁護士。

オスモ・コスキネン ミヨルニルの元社員。

ブラッド ウクライナ系組織のメンバー。アメリカ人。

ブルノー・スタマティ

ブラッドの仲間。指紋鑑定人。

ペッカ・タルグレン

スオメンリンナ島の博物館員。

アルト・ファレニウス

フィンランドのサウツコ銀行の頭取。

ホーカン・ニューダル

デンマークの海軍士官。後年は廷臣に。

ダウマー（マリア皇太后）

ニコライ二世の母。

ピーダ・アクスデン トルマーの父。

パーヴォ・ファレニウス アルトの祖父。サウツコ銀行の創業者。

カール・ウォンティン

パーヴォと関係のあるデンマーク人。

アンナ・アンダーソン

アナスタシアを自称した女性。

コペンハーゲン
(承前)

ユーズデンはハンモックの上でゆらゆらと揺れていた。頭が痛む。もしまぶたを開けば、まばゆい太陽に目がくらみそうだ。自分はどこにいるのか。目を覚ませばそこにあるはずの空間よりも、ここのほうがはるかに心地よいことだけはたしかだ。何かに押され、ハンモックが大きく揺らぎだす。頭が疼く。灼熱の太陽はもう冷えきっている。最近の記憶が、いくぶんはつきりした時と場所の認識をともなつて、ふたたび形をなしはじめる。やがて完全なる記憶が、しびれた手足にめぐりだした血潮のごとく押し寄せる。ユーズデンは目を開いた。

つなぎの作業服にニューヨーク・ヤンキースのロゴ入り野球帽という恰好の、悲しげな顔をした細身のアジア系の男が、汚れたスニーカーの爪先でユーズデンをつつくのをやめ、じつと顔を見おろした。男は奇妙に訛ったデンマーク語で何か言った。ユーズデンはうめき声しか返せなかった。

片方の肘をついて身を起こし、しょぼつく目であたりを見まわす。ふたりはケルセ

ンの事務所の外の廊下にいた。"A・ケルセン、弁護士"と記された右手のドアは、固く閉ざされている。頭上の薄暗い照明が、剥き出しの壁や床や、作業服の男——おそらく、オフィス区画の管理人だろう——の緊張した表情を照らし出していた。男はさつきと同じ、まるで理解できないことばを繰り返した。

「英語は話せるか？」ユーズデンは尋ねた。自分が発したとは思えない不明瞭な声だ。ウイスキーのにおいが漂っているが、においの元は自分のようだった。視線を移すと、かたわらにジョニー・ウォーカーの空のボトルが転がっていた。どうやらケルセンは、ユーズデンを泥酔した侵入者に見せかけるために、ファイル・キャビネットにあつたウイスキーを一本犠牲にしたらしい。このなりでは、どう見ても立派な酔っぱらいだ。頭痛の中心とおぼしき部分に手をやる。左の眉のあたりがぬるりとして、ふれると痛んだ。引っこめた手を見て、そのぬめりは血だとわかった。混濁した意識の表層に、この廊下まで引きずられてきた記憶がおぼろげに浮かんでくる。腕時計の文字盤にどうにか焦点を合わせ、時間をたしかめると、ノーヴィに攻撃されてから、意外にも二十分ほどしかたっていないかった。「英語は話せるか？」もう一度尋ねる。「ええ」管理人は眉を寄せてユーズデンを見おろしている。「ここにいられたら困ります」

「それはもつともだね」ユーズデンが難儀してゆっくり立ちあがると、管理人は気遣

わしげに一步退いた。^{しりぞ}

「いますぐ出ていってくれないと、警察を呼ばなくちやなりません」

前かがみになると吐き気に襲われ、ふたたび身を起こすとおさまった。しかし頭はひどく疼いていた。沸々と怒りが湧いてくる。ノーヴィを信用した自分は、ケルセンを信用したマーティーに劣らぬばかりだ。あのふたりは同じ穴のむじなだった。そしてまんまと足をすくわれた。いまごろは取引場所で、莫大な実入りを待ちながら、その使い途に思いを馳せているのだろう。追いつくことさえできれば、態勢を立てなおす余地はあるかもしれない。が、方法が思いつかない。それに、取引場所がどこなのかもわからなかった。どうすることもできない。せめて――

「出ていってください。面倒はごめんです」

「ぼくだってそうだ。だが、もう面倒なことになってる。まちがいなく」

「力にはなれません」

「いや、それがなれるんだ。ぼくはここにはいらなくちやならない」 ユーズデンはケルセンの事務所のドアを指さした。「きみは合い鍵を持ってるはずだ」

「あなたを入れるわけにはいきません」

「悪いが……」 ユーズデンは腰をかがめて空のウイスキー・ボトルの首をつかみ、壁に叩きつけた。管理人が驚いて跳びあがる。ガラスの破片が床に散らばる。「力づく

でも入れてもらう」そう言って管理人と階段のあいだに立ちはだかった。血のついた、酒くさい体で。逆らうと危険な男に見えるだろう。「ドアをあけろ」

「そんなことできません。職を失ってしまいます」

「命を失うよりましだ」ユーズデンは割れたボトルを武器のように構えた。自分がそんな行動に出ていることが信じられなかった。だが、ここで礼儀正しく理性に訴えても、何ひとつなしえないだろう。管理人は怯えていた。その怯えが唯一の頼みの綱だった。「ドアをあけろ」

「お願いです、こんな――」

「あけるんだ」

「わかった、わかりました」管理人は服従のしぐさをしてポケットを探った。重そうな鍵束が出てきた。彼は汗を垂らし、浅い息をしながら、震える手で鍵を選び分けていく。ユーズデンはそんな苦渋を強いている自分がいやになった。それでもあとへは引けない。

「早くしろ」

「わ、わかってます。ありました」管理人はドアのほうへ移動し、解錠してドアを押しあけた。

「照明をつけてなかにはいれ」

管理人は従った。ユーズデンがそのあとにつづき、なかからドアを閉めた。容赦ない蛍光灯の明かりのせいで、事務所は先刻とちがつて見えた。だが最大のちがいは、机の上のアタッシェケースがなくなっていることだった。

「きみの名前は？」

「ウイジャヤパーラ。みんな……ウイジと呼びます」

「いいかい、ウイジ、いまからぼくが言うことをしてくれたら、きみは無事ですむ。わかるな？」

「お願いです、乱暴はしないでください」

「しない。言ったとおりのことをしてくれるなら」

「はい、もちろん、します」

「机の向こうへ行つて椅子にすわるんだ」ユーズデンが背中を軽く押すと、ウイジは歩きだした。

ふたりは机にたどりついた。ウイジがゆっくりと向こうへまわって腰をおろす。

「電灯をつけろ」

ウイジは手を伸ばしてスイッチを入れた。柔らかな光が机の上にひろがる。

ケルセンが使ったメモ用紙がそのままの位置にあった。そして、メモした紙も破られずに残っていた。迂闊なやつだ——こちらにとってはありがたいが。ユーズデンは